

あの日の長根リンク

水都・八戸の半世紀

⑤ 水都、新時代へ

今月下旬。一般開放が終わった午後7時、八戸市の長根リンクでは小学生から社会人までのスピードスケート競技者が練習に励んでいた。年代や競技レベルは違っても、同じリンクで鍛錬を積み、長根っ子の姿は、今も昔もリンクに活気を与えている。

「長年携わってきたから寂しさが大きい」と、リンクの管理・運営をするエスプロモで整水員を務める紫葉博さん(56)。今季最後の大会が終わった後、青森県スケート連盟関係者から「大変お世話になりました」と声を掛けられた際には、思わず涙腺が緩んだ。「親子の絆、友人との交流の場だった」と話すのは同社取締役の船田信明さん(62)。一時期より減ったとはいえ、無料開放日となれば、今でも1日に千人以上の市民がリンクを利用する。青空の下や雪が舞う中で、選手たちが銀盤を駆ける姿は見納めとなるが、「屋内リンクも市民と密着した場所になってほしい」と思いを述べる。

立派なリンクが…
屋内リンク建設は、スケート関係者にとって悲願だった。1998年の長野五輪に

活気与える長根っ子



日没後、練習に励む「長根っ子」。たち=22日、八戸市の長根リンク

スケート文化、新施設でも

合わせて長野市に造られた国内初の屋内リンク「エムウェーブ」が続いてオープンした北海道帯広市の「明治北海道十勝オーバル」では記録が次々と更新され、国際大会も多く開かれた。長根リンクが育んだスケート文化がある八戸にも、立派なリンクがあれば市民がたぐさん見に来ってくれるはず」という確信があった。下降の一途をたどっていたスピードスケートの競技人口も、市が2015年度に始めた「水都八戸パワーアッププロジェクト」などが奏功し、

小学生世代で増加傾向。県スケート連盟の田名部和彦会長(66)は「子どもたちに一流の滑りを見る機会を与えたい」との願いが強い。一方、現役世代では、青森県外から八戸を新天地に選んで飛躍する選手が増えてきた。八戸学院大3年の澤尻磨里英さん(21)は、北海道出身ながら、競技と養護教諭の勉強の両立を志して進学。選手として大きくレベルアップは、今季のジャパンカップでマスタートでポイントランキング1位という華々しい

結果を残した。選手としては、来季がラストシーズンとなる予定だが、将来も競技には関わりたいと思っている。「リンクで、子どもたちが頑張って練習する姿を見てきた。縁あって来た八戸で、スケートを教えてみたい」。水都の新時代を支える、次世代も育ってきている。

「アイススケート」の文化が残ってほしい」というのが関係者の願いだ。田名部会長は語る。「冬になれば市民がリンクへ足を運び、大会にたくさん観客が集まる。老若男女みんながスケートを滑る。それが水都・八戸の姿だ」

長根リンクはきょう28日の営業終了で、パイピング化から半世紀にわたる歴史に幕を下ろす。
(金濱千優希、里村静)